

書評

トクマライエヴ 『商業資本と商業利潤』

S. F. Tokmalajew: Handelskapital und Handelsprofit,

Dietz Verlag, Berlin, 1952, 111S.

橋 本 勲

本書は、ソ同盟において出版された同名著書の独訳版である。原著者、トクマライエヴについては、経済学得業士（カンディダート、エコノミーチエスキフ・ナウク）ということだけしかわからない。この独訳は、ベルリンのフンボルト大学の三人の学者（I. Bergman, W. Fickensher, P. Zlaber）によって共訳されている。

さて、本書が教科書的な概論書ともいふべき性格を持っていることは、一読するとすぐに明らかになる。然し、細かく注意すると、本書の意図は、決して単なる概論書にとどまるものではない。我が国の資本論研究においても手薄な分野として残されている商業資本の問題にも重要な示唆をあたえている。そこで、紙数の都合上、全般的に紹介することが出来ない関係から、ここでは先ず、本書の概論書の側面を、商業経済学の体系は如

トクマライエヴ「商業資本と商業利潤」

何に構成されるべきかという観点からとりあげ、次に、資本論研究にとつても重要と思われる論点を中心として概略の紹介を行いたいと思う。

(一)

本書の構成は、第一章、産業資本の歴史的先行者としての商業資本。第二章、資本主義における商業資本。第三章、資本制商業の諸形態。第四章、外国貿易と商業政策。の四章にわかれている。

いうまでもなく、第一章は、前期的商業資本の歴史的敘述、第二章は、資本制商業資本の理論的敘述である。我が国の「概論書」では、これと順序が逆になって、理論から歴史、という順序になっているのが普通である。然も、「歴史」の中に、前期的商業資本から独占資本主義の諸問題までも含められている。このような扱い方に対して、本書の構成は、次のような問題を提出しているのではなからうか。周知の如く、「資本論」第三巻第四篇、商業資本の中では、第二十章「商人資本に関する歴史的考察」が、第十六章から第十九章までの理論的敘述のあとになっている。これは、「資本論」の敘述が論理的順序に従って行われており、その場合、質の異った生産様式の下における歴史（Ⅱ前期的商業資本に関する歴史）は資本論の論理的な敘述の順序と逆行するので、理論的敘述のあとにおかれているのである。つまり、第二十章の前期的商業資本が第四篇のな

かて一番最後の章におかれているのは、資本制以前の生産様式の下における商業資本として分析されてい、たからである。然し、概論書においては、このような資本論の敘述の嚴密な論理的順序は緩和されてもよい。けれども、前期的商業資本の歴史と資本制商業資本の歴史は、媒介される理論によって論理的に違つた平面にある。そこで、我が国の「概論書」にみられる如く歴史の敘述の中に前期的商業資本から独占資本主義下の商業資本までも一緒に含めるのは先資本制商業と資本制商業を、換言すれば、異質の生産様式の下における商業資本（Ⅱ例えば前期的商業資本と資本制商業資本）と同質の生産様式の下における商業資本（Ⅰ資本主義の各発展段階における商業資本）とを論理的に同視してしまふことになりはしないだろうか。これはマルクスが資本論の論理的順序として嚴密に注意し區別した点である。此の点、本書の構成は、独占資本主義の諸問題を、第三章、第四章において取扱つていたので、このような論理的混同を招くおそれのない体系の一つとして注目されるべきであろう。

第三章「資本制商業の諸形態」では、「卸売商業」「取引所商業」「小売商業」と、これら諸形態の特徴と歴史的發展を述べ最後に「資本主義の諸矛盾の尖鋭化の下における商業資本の役割」で結ばれている。何れも我が国の研究にとって撰取すべき点が多いが、特に、最後の節の分析は精彩を放つてゐる。第四章においては、外国貿易とその政策史が取扱われている。ここ

では、「保護貿易主義」 Protektionismus といふ、「自由貿易政策」 Freihandelspolitik が、前者では、重商主義者、後者では、古典学派の所説を引証しつゝ、歴史的に敘述されているが、大して、注目すべき新しい論点はない。むしろ、最後の「帝國主義的保護貿易主義」において、戦後のマーシャル・プランにまで説き及んでいる点、又何れの節においても、おのおの基礎的一般的な諸問題と共に、自国の具体的な諸問題が含まれてゐる点などは、稍もすれば、外国文献による外国の事情の説明に終始したり、現在の現実的問題が軽視され勝な我が国の傾向にとつて、注意されるべき態度であろう。然し、本書のとりあげ方にも疑問な点が残されている。例えば、外国貿易政策が述べられているのにも拘らず、国内商業政策がとりあげられていないのは何故だろうか。又、商業資本を論ずるにあつて、実現理論を含める必要はないのであろうか、等々の諸点が数えられる。けれども、本書の構成そのものが、商業経済学の体系は如何に建設されるべきかという問題に貴重な一石を投じていることは否定出来ない。

(二)

次に、資本論研究にとつて関連ある論点を考察しつゝ内容に立入つてみよう。第一章では、前述の如く、先資本制商業の分析が行われているのであるが、先ず第一節では、商業の発生史が、社会的分業の発達と関聯せしめて描かれてゐる。一原始共

同体が衰退し、奴隷制度が発生してくる時代には、商業は交換商業「Tauschhandel」の形態、すなわち、商品と商品とが直接に交換される形態で行われるのである（三頁）が、これは、第一の大きな社会的分業、第二遊牧諸部族と爾来の未開人大衆との分離に基いて発生した。（交換商業の原始形態として、贈与交換 Geschenkaustausch、饗応 Bewirtung、掠奪商業 Raubhandel、海上掠奪 Seeräuberei、啞取引 summer Handel 等にもみられている。）規則的商業の条件は、第二の大きな社会的分業、手工業の農業からの、都市の田舎からの分離に基いて成立した。つまり、商品流通の発達と貨幣の成立にともなう、次第に職業的商業の成立のための諸条件が形成され、かくて第三の大きな社会的分業、商人階級の分立が行われた。

第二節「奴隷所有者の及び封建的社会的商業資本」の中では、商業利潤の問題が明確にされている。その当時の商業利潤の源泉、商業資本の搾取対象として、第一に、小商品生産者 die kleinen Warenproduzenten すなわち、農民と手工業者、（彼等は、商人に自らの商品を価値以下で販売し、商人によって商品を価値以上で買わされていたのである、）一四頁）第二に、奴隷所有者、封建領主、専制君主が所有していた剰余生産物。この二つが指摘されている。このような理論の規定によって、はじめ、商人階級と封建的支配階級との対立が明瞭に理解されるであろう。また本節では、商業資本が封建社会を解体し、商品経済を促進するという進歩的役割も強調されている。

トクマライエヴ「商業資本と商業利潤」

最後の第三節では、産業資本の生成と、商業資本が産業資本の代理人へ転形してゆく過程が描かれている。そこでは先ずオランダが進出し、それがイギリスの躍進によって衰退していった歴史的過程が述べられ、「オランダの権力は、商業資本の強さと力に基き、イギリスの力は、産業資本の強さと力に基いていた。」（一八頁）という概括をあたえてから、商業資本の従属過程を産業資本との対抗関係において理論的に展開する。

すなわち、第一には、商業資本が次第に生産面に侵入し、自ら産業資本に転化する道、第二に、産業資本が、手工業や小営業生産 Kleingewerbeproduktion から直接に発生する道を指摘し、マルクスの封建制生産様式から資本制生産様式へ移行する三通りの道をあげている。更に、商業資本と産業資本の対抗関係と、産業資本成立期における商業資本の役割に言及し、そこで、レーニンの業績を紹介しつつ、最後に、ボクロフスキーやボグダノフが称えた「商業資本主義なる特定の歴史的時代」が存在するという理論を批判している。以上第一章の歴史的分析を通じて、資本論の第三巻第二十章「商人資本に関する歴史的思考」は極めて理解しやすい、明確な敘述をもって具体化されているということが出来るであろう。

(三)

第二章、「資本主義における商業資本」は、本書の核心的部分である。第一節では、商業資本は、産業資本のうち流通過程

で機能する商品資本の一部分が分離、独立した転化形態にはかならないことが明らかになり、第二節では、商業資本の利潤の源泉は、生産過程において産業労働者によって創造された剰余価値であり、その剰余価値が競争の過程を通じて商業資本にあたえられる機構が簡潔に説明されている。ところで、この剰余価値の分配と均等化の機構の説明は我が国の資本論研究と異った解釈を示しているので、少し立入って述べてみよう。

問題は、純粹流通費用の解釈にかかっているのであるが、先ず流通費用を除外して、剰余価値の分配の機構を例解してみると次の如くである。産業資本を $900(720c + 180v)$ 、商業資本を 100 、剰余価値を $180m$ とすると、剰余価値 $180m$ は、社会的総資本 $900 + 100 = 1000$ に配分されなければならないから、平均利潤率は 18% になる。そこで産業資本家は $1080(720c + 180v + 162p)$ は産業利潤)で商人に売り、商人は商業利潤 $18m$ (は商業利潤)を加えて 1080 で売る。この商人の販売価格 1080 は、商品の総価値 $720c + 180v + 180m = 1080$ と一致しているので問題はなし。(三三頁参照) さて、第三節の「純粹流通費用」に進むと問題が出てくる。というのは、マルクスは、流通費用を含めた例解を次の如く説明しているからである。前例の場合に、流通費用のために更に 50 の追加資本が投下されるとすれば、剰余価値 180 は、社会的総資本 1050 の上に分配されなければならない。従って、平均利潤率は $17\frac{1}{2}\%$ に低下する。「産業資本家は商品を $900 + 154\frac{1}{2} = 1054\frac{1}{2}$ で商人に売り、商人はこれを $1130(1080 + 彼が$

再補填しなければならぬ諸費用のための 50) で売る。」(資本論第三卷、三二三頁、日評版 九一二九三頁) と述べているのである。これは、既に、森下教授、(商業経済論、一二七頁) 宇野教授(マルクス経済学の研究、一六七頁)によって誤りではなからうかと疑問視されてきた点である。然し今迄の解釈は、何れも、商人の販売価格 1080 が、商品の総価値 1080 を超えているという点から疑問を抱いているが、その超過部分である流通費用 50 に関して述べられたマルクスの一句が看過されていたのである。曰く「それは、『流通費用は』…ある名目的価値を形成する要素として商品の販売価格に入りこむ。」(資本論、第三卷、三一九頁、日評版、九一二八五頁) と。トクマライエフは、マルクスの例解をそのまま用い、すぐそのあとで名目的価値を次の如く解釈している。「純粹流通費用に支出された資本は如何に填補されるか? 物的流通費用(事務所とその維持簿記帳簿、用紙、印刷広告、郵便料等に対する支出)は、マルクスが指摘する如く、たとえ商品の価値に少しも現実的追加を形成しなくても、『ある名目的価値を形成する要素として』販売価格に入り込む。価値の点では、物的流通費用は、剰余価値の犠牲において商品価値から常に填補され物的には、それは、流通部面そのものにおいて消費される商品量の一部から填補されるのである。流通過程に消費される商品が多ければ多量程、名目的商品価値を形成する要素が大きくなり、又、それだけ、商品の販売価値と、その現実的価値——それは、平均的な生産諸

条件によって、すなわち、その生産に必要な労働時間によって決定される——との相異が益々大きくなるのである。」(三六頁)と。このように現実的価値100から流通費用部分のだけ超過した販売価格120と名目的価値形成とを結びつけて考えたと、これは決して単なる計算の誤ではないことは明らかである。然しながら、価値と価格の一致という前提をどう考えたらよいのかという問題は残されている。

第四節では、商業労働者の分析に移る。先ず商業労働が非生産的労働であることを解明し、次に商業労働者の搾取について曰く、「かくて、商業従事者の搾取の本質は、彼等の不払労働時間の間は支払われることなく、産業資本から商業資本に譲渡された剰余価値の一部を実現するということになる。商業従事者の不払労働は、剰余価値の実現の費用を引下げ、剰余価値に対する商業資本の分前を高めることを可能にする。」(四三頁)と。

第五節、「商業資本による小商品生産者と消費者の搾取。」先ず商業資本は小商品生産者を次のような形で搾取する。一、直接、契約制度 Vertragsystem によって、二、流通局面の上で。(多数の中間商人は、彼等の利潤を圧迫する)三、購買者としても。(缺状価格差 Preisschere によって)四、商人に債務的に従属することによって。次に、商業資本は、購買者も搾取する。一、信用販売によって。二、投機的商業 spekulativer Handel によって。すなわち、競争中、あるいはその前後に闇市場格価格の価格差を利用するなどの方法によって。第六節、「消費、購買、販売協

トクマライ、エヴ「商業資本と商業利潤」

同組合」をもって第二章は閉じられる。然し、このふきんから次に、具体的な問題にふれてくるので、抽象的問題は稍薄れてくる。本書の意義は、これまでに紹介した、「資本論」をめぐる抽象的理論の部分にあるというよりは、それから一步進んで、抽象的理論を歴史的現実の分析のなかへ具体化した後半の部分にあるということが出来るであろう。例えば、商業資本の集積と集中、恐慌と商業資本など、注意すべき問題が多い。然し、ここでは、紙幅と、理論を中心として紹介するという関係から、割愛されなければならない。(一九五四、八、三二)

執筆者紹介

大泉行雄	香川大学経済学部長
稲毛満春	香川大学経済学部助手
植村福七	香川大学経済学部講師
井上康男	香川大学経済学部助手
稲田陽一	香川大学附属図書館司書
橋本 勲	香川大学経済学部助手